

(論文)

情報関連科目における行為選択とその要因

宮崎 智絵・野呂 一仁

1. 問題の所在と調査概要

最近の不況により就職率も低下している中において大学における授業内容もより資格志向、実践志向へと変化してきている。さらに多くの大学ではGPAを導入しており、一部の学生の単位に対する意識が高くなってきている。「S」を取ろうと必死になっている学生がいる一方で、無気力、やる気のない学生も見受けられる。つまり、一生懸命に授業を受け、積極的に授業に参加する学生がいる一方、私語をしたり、インターネットを閲覧したり、携帯・スマートフォンを操作したりと授業に集中しない学生もいる。このような受講態度の差異はなぜおこるのだろうか。たいていの場合、授業を聞いてノートを取り、授業を理解しようという態度をとらなければ単位は取れないものである。学生は、どのような基準で受講態度を選択しているのだろうか。あるいは行為選択基準はないのだろうか。そしてどのような要因が行為選択に影響しているのだろうか。情報関連科目では操作の説明とともに課題作成など学生が主体的に授業に参加しなければならないものが多く、意欲的に取り組まなければ身に付かず、単位を落とすことになるのである。このような授業時の行為選択について情報関連科目において調査を行なった。

アンケート内容は、性別、年齢、学部、入学方法、これまでの教育状況として塾、習い事、家庭教師、出身高校など。授業における受講姿勢として1年次の情報関係科目について必修か選択か、自分の受講態度として欠席、遅刻、早退、熱心に受講したか、私語、他の授業の準備、インターネット利用、携帯利用、携帯音楽端末、睡眠、集中力、予習・復習、レポート提出状況、テキストを持ってきたか、質問をしたかなど。また、大学の学習に対する意識、今の世の中についての意識について⁽¹⁾、将来について、何になりたいか、どうになりたいか。社会的関係の構築についてボランティア。パソコンを必要としているか、現在、将来必要と感じているか。授業の理解度、パソコン操作の習熟度などについてである。

本調査は、立正大学と二松学舎大学の情報関連科目で2013年1月の授業内に行なった。調査対象者の属性は、男性58名(37.4%)、女性97名(62.6%)、1年生142名(91%)、2年生12名(7.7%)、4年生2名(1.3%)である。学部は、国際政経学部18名(11.4%)、社会福祉

学部 80 名 (50.6%)、文学部 58 名 (36.7%)、無回答 2 名 (1.3%) である。出身高校は、普通
 高校 132 名 (85.7%)、商業高校 5 名 (3.2%)、総合高校 8 名 (5.2%)、その他 9 名 (5.8%) で
 ある。大学への入学方法は、一般入試 40 名 (26.0%)、指定校推薦 70 名 (45.5%)、自己推薦
 10 名 (6.5%)、AO 入試 19 名 (12.3%)、公募などその他が 15 名 (9.7%) である。男女比が社
 会福祉学部の子ども福祉教育科の学生が多かったこともあり、女性の比率が高い。また、情
 報関連科目の基礎的科目で実施したクラスが多かったため 1 年生が多くなっている。

学習に関する項目では、学習塾への通塾歴は 110 名 (70.1%) があるが、家庭教師受講は 12
 名 (7.6%) と多くの学生が家庭教師よりも塾へ通っている。また通塾歴は 1 年～2 年の学生
 が多く、受験対策として通塾していたと思われる。そして多くの学生が家族または個人でパ
 ソコンを所有しており、所有していない学生は 4 名 (2.5%) のみである。情報関連科目を学
 習する環境は大学だけではなく家庭でも整っている状況がうかがえる。

2. 授業態度と学習意識

大学の授業でパソコンに対してどのように取り組んだかについて見ていこう。Word
 (Q3_1_1) は 150 名 (96.2%)、Excel (Q3_1_2)
 は 145 名 (92.9%) が取り組んでいるが、
 PowerPoint (Q3_1_3) は 88 名 (59.1%)、イン
 ターネットは 79 名 (68.7%) と Word や
 Excel に比べるとやや取組みが低くなってい
 る。

多くの授業で Word や Excel は取り扱って
 いるが、インターネットや PowerPoint は授
 業によっては取り扱っていないこともあり、
 このような結果となったのではないかと思わ
 れる。インターネットに関しては、すでにリ
 テラシとして大学入学以前に身につけている学生も多く、特別に授業で取り上げる必要はな
 いということであろう。また、PowerPoint も社会人としては身につけておいた方がよいが、
 大学の情報関連科目以外の授業では使用する機会は少ないため、情報関連科目でも Word や
 Excel に比べると授業時間が少ないことと関連すると考えられる。対象者が文科系学部のみで
 あったことと 1 年生が多かったためか、プログラミング言語は 35 名 (23.6%) しか取り組ん
 でいなかった。

調査対象授業における態度は、127 名 (81.4%) が出席をしたと回答しており、126 名
 (80.8%) がほとんど遅刻をしなかったと回答している。授業態度の基礎となる出席や遅刻に
 関しては非常に良い受講態度であるといえる。情報関連科目の場合、データの入力や配布
 など遅刻や欠席をすると取り返しのつかないことも多く、また、授業の途中から聞いても
 理解できないことも多いためであろう。熱心に受講した学生は 47 名 (29.9%)、まあまあ熱
 心に受講した学生も入れると 136 名 (86.6%) である。コンピュータの操作は、少しでも説
 明を聞いていないとその先の操作もできないため、一生懸命に聞き逃さないように熱心に受
 講している学生が大半である。レポートは 122 名 (77.7%) がきちんと提出している一方、

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	あてはまる	150	94.9	96.2
	あてはまらない	6	3.8	3.8
	合計	156	98.7	100.0
欠損値	システム欠損値	2	1.3	
合計		158	100.0	

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	あてはまる	145	91.8	92.9
	あてはまらない	11	7.0	7.1
	合計	156	98.7	100.0
欠損値	システム欠損値	2	1.3	
合計		158	100.0	

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	あてはまる	88	55.7	59.1
	あてはまらない	61	38.6	40.9
	合計	149	94.3	100.0
欠損値	システム欠損値	9	5.7	
合計		158	100.0	

9名（5.7%）が提出していない。テキストやプリントは143名（91.1%）がきちんと持ってきているが、14名（8.9%）が持ってきていない。質問は48名（30.6%）しているが、108名（68.8%）があまりしていない。私語をした74名（47.1%）、携帯電話やスマートフォンを操作した63名（40.1%）といった受講態度が良くない学生も多く見受けられる。スマートフォンではメールやLINEなど、授業中でも着信があるとチェックしたり、着信がないか気にしたりする学生が見受けられる。さらに他の授業の準備をした14名（8.9%）、指示がないのにインターネットをした36名（22.9%）、寝た46名（29.3%）のような学生も少数派ながら存在している。全体的にはまじめに出席し、授業もまじめに受けていると学生自身は認識しているようである。しかし私語をした学生は5割近く、指示もないのにインターネットをしたり、寝たりと受講態度の良くない学生が2～3割ほどと、少数派とはいえ決して無視できる数字ではない。狭い教室内で半分の学生が私語をし、2、3割の学生が授業を聞いていないという状況は、授業運営をする上ではかなり多く感じられるのではないだろうか。また、私語などよりも目立たないが他の授業の準備をしていた学生も14名（8.9%）いた。情報関連科目の授業よりも他の授業を優先しているが、クロス集計

としては有効ではないものの、レポート提出に関しては全員が提出しており、内職がレポート提出に影響していないようである。だが、授業中寝た学生のうち若干名（3名、6.5%）はレポート提出できなかったようである。男女別では、男性の方がインターネットに取り組んでおり（ $\chi^2=4.833$

$P=0.028<0.1$ ）、レポート提出（ $\chi^2=2.824$
 $P=0.093<0.1$ ）や質問（ $\chi^2=3.662$ $P=0.056<0.1$ ）に関しては男性の方がやや積極的である。しかし私語（ $\chi^2=4.163$ $P=0.041<0.1$ ）に関しては男性の方が女性よりもやや私語をしていた。

では次に大学の学習に対する意識について見ていこう。大学の学習がおもしろいと感じている学生は85名（60.5%）おり、将来、役に立つと考えている学生も140名（89.2%）であった。大学の授業に対するポジティブな意識が伺える。大学での学習が社会一般の教養と隔離したものではなく、自分の将来に役立つものとして位置付けているが、これは社会福祉学部、とくに保育士や幼稚園教諭、社会福祉関連資格を目指す学生が多かったことも影響していると考えられる。保育士や幼稚園教諭、社会福祉の資格関連科目を主とする学部のため、資格取得に直接関連する科目が多く設置されているためである。一方で何のために学習するかわからないと47名（29.9%）が考えている。大学の授業を受身的に受講し、目的意識のない学生が3割ほど存在するのである。これらの学生に大学で学習をする意味や意義を意識させる授業展開が必要であろう。だが、成績に関しては、下がっても気にならないのは25名（15.9%）、今の生活が楽しければ成績はどうでもいいは26名（16.6%）、人より良い成績をとりたいたいと思っているのは110名（70.1%）であった。成績に関しては上昇志向があるようであり、どうしても良いと考えている学生は少ないようである。人より良い成績をとりたいたいと思っている学生も多く、競争意識が強いと同時に、成績に対する執着心のようなものもうかがえる。しかし会社に関しては有名な会社に入りたいたいのは64名（40.8%）、有名な会社より自分に

クロス表

		q3_2_10b		合計	
		あてはまる	あてはまらない		
1_1	男	度数 1_1の%	57 98.3%	1 1.7%	58 100.0%
	女	度数 1_1の%	89 91.8%	8 8.2%	97 100.0%
合計		度数 1_1の%	146 94.2%	9 5.8%	155 100.0%

クロス表

		q3_2_12b		合計	
		あてはまる	あてはまらない		
1_1	男	度数 1_1の%	23 39.7%	35 60.3%	58 100.0%
	女	度数 1_1の%	24 25.0%	72 75.0%	96 100.0%
合計		度数 1_1の%	47 30.5%	107 69.5%	154 100.0%

あった会社に入りたいと考えているのは143名(91.1%)であった。多くの学生が学習に対しては真摯な意識をもっているようである。しかし、将来に役に立つと考えてはいるが、上昇志向の指標となる有名な会社に入りたいというのでは決してなく、自分にあった会社に入りたいという現実的志向が強い傾向にある。また、男女別では、女性の方が成績が下がることに対しては気にしており($\chi^2=2.706$ $P=0.1=0.1$)、学習がなければ毎日をもっと楽しくなるとはあまり思っていないようである($\chi^2=6.669$ $P=0.01<0.1$)。男性の方は学習より自分の長所を伸ばしたいと考えている($\chi^2=4.009$ $P=0.045<0.1$)。有名な会社に入りたいかについては、男性はあてはまる学生とあてはまらない学生は半々に分かれたが、女性はあてはまらない学生の方が多かった($\chi^2=2.900$ $P=0.089<0.1$)。つまり、女性は成績は気にするが有名な会社に入りたいとはあまり思っていないのであり、将来に対する消極性はレポート提出や質問に関する消極性となって現われていると思われる。

加表

		q3_3_2b		
		あてはまる	あてはまらない	合計
1_1	男	度数 13	45	58
	1_1の%	22.4%	77.6%	100.0%
	女	度数 12	85	97
	1_1の%	12.4%	87.6%	100.0%
合計	度数	25	130	155
	1_1の%	16.1%	83.9%	100.0%

加表

		q3_3_9b		
		あてはまる	あてはまらない	合計
1_1	男	度数 29	29	58
	1_1の%	50.0%	50.0%	100.0%
	女	度数 35	62	97
	1_1の%	36.1%	63.9%	100.0%
合計	度数	64	91	155
	1_1の%	41.3%	58.7%	100.0%

3. 世の中に対する意識と自分自身に対する意識

学生が今の世の中についてどのように考えているか見て行こう。「だれでもがんばればがんばるだけ、人にみとめられる世の中だ」と思っている学生は24名(15.3%)のみで、ほとんどの学生が「どちらともいえない」73名(46.2%)か「いいえ」60名(38.2%)としている。「今の世の中は、金持ちと貧しい人の差が大きすぎる」と考えているのは104名(66.2%)であり、「人が貧乏なのは、その人が悪いからだ」は4名(2.5%)のみであった。「今の世の中では、学校の成績によって将来が決まる」は46名(29.3%)、「有名な学校を出た人のほうが、将来自分の好きなことができる」は52名(33.1%)、「よく勉強した人が、金持ちになれる」は26名(16.6%)、「よく勉強した人が、いい学校やいい会社に入れる」は58名(36.9%)、「よく勉強した人が、しあわせな生活がおくれる」は18名(11.5%)が肯定的な考えであった。がんばったから、有名な学校を出たから、よく勉強したからといってその努力が報われるとはあまり思えない世の中、世の中に対して期待や希望を持たない学生の意識が見受けられる。

また、貧乏なのはその人が悪いと考えていない学生は、よく勉強したからといって金持ちになれるとは考えていない($\chi^2=18.319$ $P=0.005<0.1$)。学校の成績によって将来が決まることに関してどちらともいえないと考えている学生は、よく勉強した人が金持ちになる($\chi^2=32.819$ $P=0.00<0.1$)、いい学校やいい会社に入れる($\chi^2=28.581$ $P=0.00<0.1$)、しあわせな生活がおくれる($\chi^2=20.933$ $P=0.002<0.1$)に関してどちらともいえないという考えである。賃

3_4_3と3_4_6の加表

		3_4_6			合計
		はい	どちらともいえない	いいえ	
3_4_3 はい	度数	2	1	1	4
	3_4_3の%	50.0%	25.0%	25.0%	100.0%
	どちらともいえない	度数 9	44	18	71
どちらともいえない	3_4_3の%	12.7%	62.0%	25.4%	100.0%
	いいえ	度数 14	30	37	81
	3_4_3の%	17.3%	37.0%	45.7%	100.0%
4	度数	1	0	0	1
	3_4_3の%	100.0%	.0%	.0%	100.0%
	合計	26	75	56	157
合計	3_4_3の%	16.6%	47.8%	35.7%	100.0%

乏なのはその人のせいではないし、頑張ったからといって金持ちになれるとも思えないという学生の閉塞感、虚しさ、世の中に対するあいまいさの意識は、大学の授業において、がんばれば良い会社に就職できる、お金持ちになれるという動機付けとしては適当でないということである。

以上のように、世の中に対する学生の意識は、授業における動機付けを考える上では重要であり、学生の意識に対応した動機付けを考える必要がある。

では、学生は自分自身についてはどのように意識しているのだろうか。「学校の勉強に自信をもっている」学生は、10名（6.4%）のみである。「私はとてもしあわせだ」と感じているの

は60名（38.2%）だが、84名（53.5%）はどちらともいえないとしている。半数の学生が自分の現況に幸福を感じていないのである。「親は私に大きな期待をかけている」では、23名（14.6%）、「家出をしたいと思ったことが何度もある」は38名（24.5%）、「親は私の気持ちをよくわかってきている」56名（36.1%）であり、親の期待をあまり感じることなく、4分の1の学生が家出を何度もしたいと思ったことがあるという。「やると決めたことは最後までやりとおす」59名（38.1%）、「みんなの前でもはっきりと自分の意見が言える」49名（31.8%）、「むずかしいことにぶつかった時こそ、がんばるほうだ」44名（28.4%）と回答しており、積極的な意識をもっている学生も3～4割近くいる。「私はまわりにいる人を楽しくさせることがじょうずだ」29名（18.7%）、「ともだちは多いほうだ」36名（23.2%）が「はい」と回答している。「運動やスポーツがとくいなほうだ」60名（38.7%）、「音楽や絵がとくいなほうだ」42名（27.1%）、「自分には人よりすぐれたところがある」26名（16.9%）、「たいていのことはうまくこなすことができる」31名（20.0%）、「自分には、将来の夢や目標がある」71名（45.8%）が「はい」と回答しており、活動的でポジティブな学生も少なからずいる。また、「先生は私の気持ちをよくわかってきている」8名（5.2%）と、学生の多くは教員に対してネガティブなイメージを持っているようである。「学校でいやな思いをしたり、元気がなくなることがよくある」38名（24.5%）、「私はたよりない人間だ」54名（34.8%）がしている。全体的に自分自身に対する意識は低く、あまり積極的に活動的ではない学生の実像が見受けられる。

4. 学生の現況と将来

学生の現況と将来について見ていくこととする。パソコンを現在必要としているかについては、Wordは145名（95.3%）、Excelは120名（77.4%）、PowerPointは97名（62.6%）

知表

		3_4_6			合計
		はい	どちらともいえない	いいえ	
3_4_4 はい	度数	16	21	9	46
	3_4_4の%	34.8%	45.7%	19.6%	100.0%
どちらともいえない	度数	7	44	22	73
	3_4_4の%	9.6%	60.3%	30.1%	100.0%
いいえ	度数	3	10	25	38
	3_4_4の%	7.9%	26.3%	65.8%	100.0%
合計	度数	26	75	56	157
	3_4_4の%	16.6%	47.8%	35.7%	100.0%

知表

		3_4_7			合計
		はい	どちらともいえない	いいえ	
3_4_4 はい	度数	28	16	2	46
	3_4_4の%	60.9%	34.8%	4.3%	100.0%
どちらともいえない	度数	18	45	10	73
	3_4_4の%	24.7%	61.6%	13.7%	100.0%
いいえ	度数	12	13	13	38
	3_4_4の%	31.6%	34.2%	34.2%	100.0%
合計	度数	58	74	25	157
	3_4_4の%	36.9%	47.1%	15.9%	100.0%

知表

		3_4_8				合計
		はい	どちらともいえない	いいえ	4	
3_4_4 はい	度数	11	25	10	0	46
	3_4_4の%	23.9%	54.3%	21.7%	.0%	100.0%
どちらともいえない	度数	4	45	23	0	72
	3_4_4の%	5.6%	62.5%	31.9%	.0%	100.0%
いいえ	度数	3	14	20	1	38
	3_4_4の%	7.9%	36.8%	52.6%	2.6%	100.0%
合計	度数	18	84	53	1	156
	3_4_4の%	11.5%	53.8%	34.0%	.6%	100.0%

が必要であるとしている。大学ではゼミなどのレジュメ、レポートでは Word を使用して作成することが当たり前となっているため、Excel や PowerPoint よりも必要性を感じるのであろう。また、将来必要であると考えているのは、Word は 150 名 (96.8%)、Excel は 147 名 (94.8%)、PowerPoint は 140 名 (90.3%) であった。ほとんどの学生が Word、Excel、PowerPoint が現在も将来も必要だと考えている。とくに Excel は 2 割近く、PowerPoint は 3 割近くの学生が、現在は必要と考えていなくても将来は必要だと感じている。だが、パソコン関連資格をもっている学生は 25 名

(16.1%) のみで、資格が必要だ (Q4_6) と感じているのは 126 名 (81.3%) であった。多くの学生が、就職活動の際にパソコン関連資格を取得しておくという認識をもっている。

q4_6b

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	はい	126	79.7	81.3	81.3
	いいえ	29	18.4	18.7	100.0
	合計	155	98.1	100.0	
欠損値	システム欠損値	3	1.9		
	合計	158	100.0		

また、本調査ではボランティアに関する質問も行っている。ボランティアは本来自発的に行うものであり、その行為は行為選択の結果であると考えられる。このことは、大学での受講態度に少なからず影響があるのではないだろうか。「ボランティア活動をしたことがあるか」という設問に対し、現在しているとの回答は 22 名 (13.9%)、以前していたとの回答は 75 名 (47.5%) であり、全体の 63.0% がボランティアの経験ありとしている。ボランティア経験と授業への取り組みの関連を見てみると、ボランティア経験有無に関わらず、授業に出席したということに、あてはまる、ややあてはまると回答しており、全体の 96.8% を占めている。しかしながら、詳細にみて行くと、ボランティアを現在しているとの回答者で、出席したという設問に、とてもあてはまるとの回答は 95.5%、ややあてはまるとの回答も合わせると回答者全員が授業に出席したとの回答をしている。ボランティアを以前していたとの回答者も、とてもおよび、ややあてはまるとの回答で、97.3% を占めている。一方で、ボランティアをしていないとの回答者で、出席をしたとの設問にとてもあてはまると回答したのは 71.4%、ボランティアをしたことがないとの回答者も、とてもあてはまるとの回答は 73.3% で、大きく差が出ている。ボランティア経験者は授業への出席も積極的であるということが見て取れる ($\chi^2=25.769$ $P=0.02<0.1$)。

ところで、大学ではさまざまな資格を取得できるように講座を開講している。現在、または過去に受講していたのは 20 名 (13.1%) だが、今後受講する予定は 55 名 (35.9%) であった (Q4_8)。調査対象者に 1

4_8

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	現在受講している	16	10.1	10.5	10.5
	過去に受講していた	4	2.5	2.6	13.1
	受講していない	78	49.4	51.0	64.1
	今後、受講する予定	55	34.8	35.9	100.0
	合計	153	96.8	100.0	
欠損値	システム欠損値	5	3.2		
	合計	158	100.0		

年生が多かったためであろう。現在受講しているのは、教員免許 13 名 (8.2%)、社会福祉士 5 名 (3.2%)、社会調査士 5 名 (3.2%) であった。今後受講予定では、教員免許 9 名 (5.7%)、図書館司書 10 名 (6.6%)、社会福祉士 30 名 (19.9%)、精神保健福祉士 12 名 (7.9%)、社会福祉主事 15 名 (9.9%)、児童指導員 7 名 (4.6%)、児童福祉司 6 名 (4.0%)、社会調査士 10 名 (6.6%) とな

4_12

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	語学系	4	2.5	50.0	50.0
	実務系	2	1.3	25.0	75.0
	その他	2	1.3	25.0	100.0
	合計	8	5.1	100.0	
	欠損値	システム欠損値	150	94.9	
合計		158	100.0		

っていた。社会福祉学部の学生が多かったため、社会福祉や児童関係の資格を受講する学生が多かった。学生の半数近くが資格取得を志向しており、資格に対する意識が高いようである。また、大学以外で講座や学校、教室に通っている学生も8名ほどおり、大学では得られない資格や知識を身に付けようという積極的な学生も見受けられた。学生によっては留学などキャリアアップを積極的に行なっている。

次に、授業態度と資格の受講との関係を見て行こう。まず、現在または過去に受講していた学生を見てみる。教員免許の受講者（Q4_9_1）は受講していない学生よりも授業中に私語（Q3_2_4）をしたり（ $\chi^2=2.702$ $P=0.1=0.1$ ）、携帯やスマートフォンを操作（Q3_2_7）しており（ $\chi^2=2.705$ $P=0.1=0.1$ ）、携帯音楽端末を利用（Q3_2_8）（ $\chi^2=5.105$ $P=0.024<0.1$ ）、指示がないのにインターネットをした（Q3_2_6）（ $\chi^2=4.326$ $P=0.038<0.1$ ）学生は、教員免許を受講していない学生よりも多かった。

社会福祉士（Q4_9_6）に関しては、遅刻をしない（Q3_2_2）（ $\chi^2=3.738$ $P=0.053<0.1$ ）、熱心に受講した（Q3_2_3）（ $\chi^2=3.160$ $P=0.075<0.1$ ）、私語（ $\chi^2=5.724$ $P=0.017<0.1$ ）は受講していない学生の方がまじめであった。

加減表

		4_9_1		合計
		0	1	
q3_2_4b1	度数	65	9	74
	4_9_1の%	45.5%	69.2%	47.4%
4	度数	78	4	82
	4_9_1の%	54.5%	30.8%	52.6%
合計	度数	143	13	156
	4_9_1の%	100.0%	100.0%	100.0%

加減表

		4_9_1		合計
		0	1	
q3_2_7b1	度数	55	8	63
	4_9_1の%	38.2%	61.5%	40.1%
4	度数	89	5	94
	4_9_1の%	61.8%	38.5%	59.9%
合計	度数	144	13	157
	4_9_1の%	100.0%	100.0%	100.0%

加減表

		4_9_1		合計
		0	1	
q3_2_6b1	度数	30	6	36
	4_9_1の%	20.8%	46.2%	22.9%
4	度数	114	7	121
	4_9_1の%	79.2%	53.8%	77.1%
合計	度数	144	13	157
	4_9_1の%	100.0%	100.0%	100.0%

加減表

		4_9_1		合計
		0	1	
q3_2_8b1	度数	4	2	6
	4_9_1の%	2.8%	15.4%	3.8%
4	度数	139	11	150
	4_9_1の%	97.2%	84.6%	96.2%
合計	度数	143	13	156
	4_9_1の%	100.0%	100.0%	100.0%

加減表

		4_9_6		合計
		0	1	
q3_2_2b1	度数	134	3	137
	4_9_6の%	88.7%	60.0%	87.8%
4	度数	17	2	19
	4_9_6の%	11.3%	40.0%	12.2%
合計	度数	151	5	156
	4_9_6の%	100.0%	100.0%	100.0%

加減表

		4_9_6		合計
		0	1	
q3_2_3b1	度数	133	3	136
	4_9_6の%	87.5%	60.0%	86.6%
4	度数	19	2	21
	4_9_6の%	12.5%	40.0%	13.4%
合計	度数	152	5	157
	4_9_6の%	100.0%	100.0%	100.0%

加減表

		4_9_6		合計
		0	1	
q3_2_4b1	度数	69	5	74
	4_9_6の%	45.7%	100.0%	47.4%
4	度数	82	0	82
	4_9_6の%	54.3%	.0%	52.6%
合計	度数	151	5	156
	4_9_6の%	100.0%	100.0%	100.0%

社会調査士は、遅刻をしない（ $\chi^2=3.738$ $P=0.053<0.1$ ）、携帯やスマートフォンを操作した（ $\chi^2=3.417$ $P=0.065<0.1$ ）、携帯音楽端末を利用した（ $\chi^2=3.654$ $P=0.056<0.1$ ）の項目で受講していない学生よりも受講態度が悪かった。

加減表

		4_9_13		合計
		0	1	
q3_2_2b1	度数	134	3	137
	4_9_13の%	88.7%	60.0%	87.8%
4	度数	17	2	19
	4_9_13の%	11.3%	40.0%	12.2%
合計	度数	151	5	156
	4_9_13の%	100.0%	100.0%	100.0%

加減表

		4_9_13		合計
		0	1	
q3_2_7b1	度数	59	4	63
	4_9_13の%	38.8%	80.0%	40.1%
4	度数	93	1	94
	4_9_13の%	61.2%	20.0%	59.9%
合計	度数	152	5	157
	4_9_13の%	100.0%	100.0%	100.0%

このように資格取得講座を受講している、あるいはしていたからといって受講態度が良いとは必ずしも言えないという結果であった。一般に、教職を受講している学生は真面目で、受講態度が良いというイメージだが、本調査ではむしろ逆の結果であった。特に私語は他人の迷惑にもなり、教員の側からも非常に授業妨害となるものであるため、教員を目指す学生ならば、教員の心理を理解していると考えていたが、顕著な差が出た。本調査は教職とは関係のない科目であったことから、学生は教職科目と一般科目との受講態度を変えているということも考えられる。

5. 考 察

調査を実施する以前の仮説では、資格取得などの動機がある学生は授業態度が良好であると予想した。また、ボランティアをする学生は授業へも積極的に熱心に受講すると予想した。ボランティア経験者は授業への出席も積極的であったものの、資格取得に関しては授業中の態度をどのように選択しているかという基準は本調査からは得られなかった。つまり、合理的選択行為は行なわれておらず、意識と行動が乖離している学生が多かったのである。このことから、資格取得などの動機付けが授業態度の改善につながるとは言えないのである。努力すれば報われるというような世の中に対する意識そのものの改善が必要なのかもしれない。

そして、ハーバーマスは、社会科学的理論における行為概念を四つの基本概念に還元している。目的論的行為の概念、規範規制される行為の概念、演劇的行為の概念、コミュニケーション的行為の概念である。授業に対する態度は、目的論的行為として捉えることができると想定していたが、どちらかという真面目に受講していた学生は規範に規制される行為である。ある一定の状況で規範が用いられる状況が存在するかぎり、個々の行為者は規範に従うかそれとも規範と衝突する⁽²⁾。授業という状況において遅刻せず出席し、熱心に受講して要求されたレポートを提出するという規範が存在し、学生はそれに対して大学という集団のなかに存在する規範に対して従うことに同意するのである。つまり、授業における行為は小学生のころから社会化されて個々人に内包化され、それが当然のこととして期待されることを認識しているのである。将来に対する目的や目標という動機付けよりも内包化された規範の方が優先されているのである。

ところで、A・コリンズとR・ハルバーソンは、アメリカでは、ハイスクールの生徒の50%が、毎日の授業に飽き飽きしているといい、カリフォルニアの9・10年生の82%が、学校の体験を「退屈で自分には関係ない」と回答している。このような深く根付いてしまった学習に対する態度を変えるには、教授・学習過程を変えることと、学校の競争がうまくいくための評価制度を変える必要がある、としている。さらに、すべての学習者に対して、ポジティブかつ意欲をもてる経験を与えられる学習環境に再設計することが、社会に求められているとしている⁽³⁾。高度情報化社会においては、今までにはなかったコンピュータなどの情報機器が学校に導入され、それまでの教授法や学習環境が大きく変化した。企業においてもコンピュータを導入したことにより、これまでとは違うスキルの学生を求めようになったのである。この変化を受け、大学でもさまざまなカリキュラム改革がなされてきた。さらに大学だけではなく小学校からコンピュータを導入し、高校「情報」科の設置に見るように、学生は大学入学以前にある程度のコンピュータリテラシを身に付けているのである。このよう

に情報関連科目が将来にわたって重要な科目であることは大学入学以前から認識することができる環境である。このことに関して渡部信一氏は、「インターネットの利用が一般化すると、教育を行う立場にある親・学校が子供達の発達段階に合わせて情報の獲得時期をコントロールすることが難しくなる。インターネットから情報を収集する時代においては大人も子供も大きな差はなく、大人としての優位性が失われる。大人の優位性が失われることは、子供にとって、手本となる大人を見出すことが困難になっていることを意味する。自分のなるべき姿を見出せずに、今を生きる若者が増加しないか心配である。」としている⁽⁴⁾。圧倒的優位性を持っていた教員が、その優位性を保持できなくなってきた。このことは、高度情報化社会において、情報機器の発達についていけない教員や大人に対して、幼い頃からすでに情報機器を使用してきた学生は、身近な教員や大人たちよりもむしろ情報の獲得については優位となっている状況もある。このような状況の中で渡部氏は、学びを継続していくためには、自発的行動として学びを行うことが重要であり、自発的行動を持続させる学びの環境整備が求められるとしている。さらに自発性には2つあり、1) 楽しいので自分から進んで行う自発性（楽しむ自発性）と2) 自分に必要なことを頭で理解して行う自発性（自主的自発性）の自発性があると考えている。後者は2a) 将来の自分の為に必要だとする自発性（将来的自発性）と2b) 他からの期待に応えようとする自発性（社会的自発性）に分けることができるとしている⁽⁵⁾。これらの自発性を考慮した授業を展開することにより、授業態度の改善につながるのではないだろうか。

また、以前、われわれが行なった基礎学力と階層に関する調査では、文化資本としての相続資本は低いが、学歴資本が高い場合、文化を家庭から受けつぐよりも学校で獲得するほうが多いため、文化に対して家庭の影響が少ないという傾向からも下流の学生は、学校で獲得する資本を内包化しているという結果を得た。つまり、格差社会といわれ、下流意識をもつ学生が増えてきている現状において、われわれは学校教育の学生に及ぼす影響がより強くなってきていることを意識し、学歴資本の量が同じであっても、それが社会のなかでその人に利益をもたらす文化資本としての量がまちまちでありうる。その要因の一つとしてわれわれは、学校教育以外の場からもちこまれた別種の身体化された資本、別種の性向にたいして、教育機関がどの程度の価値を認めるかは場合によって異なるからであると考えた⁽⁶⁾。学校で獲得する資本をどのように内包化するか、あるいは内包化しないか、それによって授業態度に相違が出るのかといった授業態度の相違が、学歴資本や文化資本に還元できる可能性を含めて、今後、より多角的に検討・分析していく必要があるだろう。そして、受講態度の選択基準を明確にすることにより、授業の目的、内容および展開、位置づけを再考する手がかりとなるのである。

(参考文献)

- (1) 荻谷剛彦、志水宏吉編『学力の社会学』岩波書店、2004年
- (2) ユルゲン・ハーバーマス、河上倫逸・フープリヒト・平井俊彦訳『コミュニケーション的行為の理論（上）』未来社、1985年、pp132-133
- (3) A・コリンズ、R・ハルパーソン／稲垣忠編訳『デジタル社会の学びのかたち－教育とテクノロジーの再考』北大路書房、2012年、pp181-183
- (4) 岩本正敏・渡部信一「高度情報化時代の学びと遊び」（東北大学大学院教育情報学研究所／渡部信一監修

- 『高度情報化時代の「学び」と教育』) 東北大学出版会、2011年、p319
- (5) 同上書、p323
 - (6) 友永昌治・宮崎智絵・近藤武明・武井順介・野呂一仁「Excelにみる学習環境と高校情報の大学への影響—2005年、2006年との比較—」『私立大学情報教育協会平成18年度大学教育・情報戦略大会資料集』私立大学情報教育協会、2007年